

等身大の〈憲法〉

die prätze『現代劇作家シリーズ9 日本国憲法を上演する』
2019年4月30日(火)～5月13日(月)@d一倉庫

10連休といわれた2019年5月の大型連休。日暮里・d-倉庫では「現代劇作家シリーズ」第9弾として、劇作家の戯曲に代わり日本国憲法を題材にした「〈日本国憲法〉を上演する」が開催された。演劇、ダンス、パフォーマンス・アートなど様々な表現方法による参加9団体のうち4団体の舞台を観劇。いずれも意味のまとまりとしての日本国憲法条文は舞台上になかったにもかかわらず、憲法を取り巻く現状が伝わってきた。

京都出身のSuper D「新日本帝国」は、やわらかい関西弁と個人への抑圧や強制に響く憲法の強い言葉遣い「シテハナラナイ」「サレナケレバナラナイ」が対照的。議会での不毛なやりとりと決議のあつけなさを戯画的に描き、「ひとまず変えてみたらいいやん」が信条かと思いきや、アブグレイブ刑務所カアウシュヴィッツを彷彿とさせる人間ピラミッドを象徴的に見せるラスト。なかなか皮肉の聞いた舞台であった。



IDIOT SAVANT theater company

IDIOT SAVANT theater company 『忠恕。放る。線上。』は、今年2月のTPAMフリンジ参加作品『日本国憲法』の続編。2面の壁に投影されていた日英の憲法条文がなくなり、黒いスーツに身を包みつぶれた声で叫び呻く身体に〈日本国憲法〉への怒りとも祈りともつかない思いが仮託される。しかし2月の『日本国憲法』を見ていない観客に憲法とのつながりが伝わったかには疑問が残った。

中野坂上デーモンズの憂鬱『No.12』は、部活女子高生の世界観を通して〈日本国憲法〉を現出。憲法とそれを取り巻く現代社会の縮図として、校則と先輩後輩の序列社会、女子高生同士のかみ合わない会話が散りばめられる。他者の声など耳にはいらぬ叫びばなしの女子高生。自ら醜態を晒すことで規則を守る意味を伝えられない教師や母ら(大人)。国際社会などの外部は宇宙人レベルだろう。読まることがない校則同様に矮小化された〈日本国

憲法〉は、認識外の距離感にもかかわらず纏わりつく煩わしいものとして示される。賑やかで元気いっぱいな舞台には、ひりつくような寂しさも感じられた。



中野坂上デーモンズの憂鬱

上記3作品がどちらかといえば憲法への負のイメージを見せるのに対し、bug-depayse『彼について知っている僅かな事柄』は、それでも憲法が日常を支えることを示す。電動車椅子で登場する〈彼〉が、憲法条文を意味の連なりにならない声で持てる力を振り絞り語る。「第11条」「第12条」と読み上げるガイド役の女性の声で、それが基本的な権条項であることに気づく。小さな体で舞台のあちこちに置かれた自転車タイヤを回しながら、人生を語る年老いた別の車椅子の〈彼〉の面倒をかがいしくみる、もうひとりの〈彼〉。何の意味もないように思えるタイヤを回す行為が、日常の営みに見えてくる。〈日常〉を生きることの難しさと大切さが、ハンディキャップを抱える〈彼〉たちの存在感と共に憲法のイメージに重なる。憲法を理性的思考でとらえることを静かに語り掛ける舞台である。

個々の舞台の憲法への距離感だけを言えば共感できるものはなかったが、身近な等身大のものとして憲法が考えられた作品を連続してみることで、憲法を取り巻く現状を改めて考える契機となった。連休中は笠井勲『日本国憲法を踊る』(4/21愛知県芸術劇場小ホール)、かもめマシーン『俺が代』(4/19-4/20愛知県芸術劇場小ホール、4/27-4/30早稲田小劇場どらま館、5/5-5/6沖縄・アトリエ銘苅ベース)、原マスキム山田せつ子『朗読で聴く日本国憲法』(5/3 三鷹・SCOOL)、秋田雨雀・土方与志記念青年劇場『みすてられた島』(5/8～愛知・知多市勤労文化会館ほか32カ所)など、各地で〈日本国憲法〉が上演された。大型連休を構成する国民の祝日のひとつに〈憲法記念日〉が含まれることを知らぬ風情にあふれる行楽情報の中、小さなメディアである舞台に日常としての政治を考える可能性があったことを好ましく思う。

不条理と異端の共生

OM-2『Opus No.10』
2019年2月22日(金)～24日(日)@下北沢ザ・スズナリ



©山口真由子

衝撃だった。現実との境界の見えないむき出しの表現を目の当たりにし、身体と意識の性認識の矛盾の問題や、自分自身が引きずる家族との関わりと死による葛藤などを反射的に重ね合わせ、あたかも役者へ乗り移られたような錯覚に襲われた。頭が締め付けられ心臓をえぐり出されたようなショックと虚脱感にとらわれるとともに、矛盾をはらむ世俗的倫理観と個の存在の共生という、身近でありながら奥の深い課題を正面から突き付けられたような感を受け、舞台を見てからしばらく経った今でも鮮烈に脳裏に焼き付いて離れない。

うず高く詰まれた段ボールの壁の全面に、プロジェクターが蒼白くぶい樹目模様の光線を刑務所の檻のように投影している。舞台の中央で年齢も性別もあいまいな小柄な役者が椅子に座って読書にふける中、壁のあちこちから太長い筒がスルスルと突き出し、管に反響する乾いた声が沈黙を破る。段ボールの壁の窓が次々と開き、役者の頭部だけがのぞき出は、他愛もない会話から政権の批判、言論の自由、憲法議論などが、独り言、役者同士の会話または観客への語りかけとして無秩序に飛び交う。壁の端の箱では髪長い女性が所在無げにうずくまっている。声はだんだんと都会の喧騒のように混ざり合い、耳を覆うばかりに高まった所で「うるさい」と怒号が鳴り一旦静寂に戻るが、たちまちまたざわめきが噴き上がり幾度となく波を繰り返す。中央の役者はやがて背を向け着衣を脱ぎ、腕を背中からませゆくりと閃える。「見ざる聞かざる言わざる」の三匹の猿のように、周囲の声に目耳口を閉ざし耐えようとしているのだろうか。あるいは体制への不安や批判、普遍的常識という殻にひそむ矛盾やごまかしに気付いて声をあげようとしつつも、虚構の鉄格子にがんじがらめに囚われもがき、際限なく憤りを溜めているのかもしれない。

ここまで観て、よくある政治や世相に対する表面的な批判の寸劇かと一瞬あなどったのも束の間、突如耳をつんざく轟音とともに壁が崩壊する。核の

爆発だろうか？それとも蓄積した不満が爆発したのだろうか？天変地異のような破壊音が響く中で蹂躪され逃げまどう人々がやがて去り、静かに降り積もる核の灰を思い起こさせる、ブラウン管の砂の嵐のような映像の景色となり静けさが戻る。静けさ？いや違う。これから始まる絶望と破壊に向かうモノローグの幕開けだ。ここは本当にあの小さなスズナリの劇場だろうか。疾風が吹きすさぶ荒涼とした平原にたざずんでいるようだ。

いつの間にか、舞台にはありふれた机やロッカーが並んでいる。おもむろに巨漢の男がのっそりと現れる。彼を縛る格子も壁ももうない。それでもなお彼は自らが何かに抑えつけられているかのように、ゴミ箱を頭に被り、そこに内蔵されたカメラを通して舞台に顔を映し出し、大柄な体に似つかわしくない不思議にとらえたいスローモーションのような動きをしながら、吸い込まれるような語り口で自身の過去の話を走馬灯のように話し始める。子供の頃、女装というささやかな秘密の趣味が見つかったことで、父親から受けた拒絶と虐待の辛い過去を。ゆがんで悲痛に満ちた思いを、魂の叫びとしてじわじわ絞り出しながら、徐々に高潮してゆく。

老衰の床にあって弱った父親を見舞ったときに与えたひとかけらの角砂糖で、父親が誤嚥性の肺炎をおこしやがて息絶えた可能性を否定できない事実に対する自責の念。そして世間一般の常識とは外れているとはっきり自覚しながらも、自分自身では解決のしようのない身体と心のかい離による性的倒錯。それを理解出来ず、世間体に縛られ自分を拒み人格まで否定し、今や霊安室に横たわっている父親のなきがらに、恨みともゆるしの懇願ともつかない言葉をかけ、身悶えながら奈落の底に落ちてゆく。小山のような役者の体とはアンバランスな、物憂くゆがんでどこか弱いキャラクターの設定が、異様な感覚をさらに高める。彼が唱える言葉はそのままプロンプターのように壁に投影され、観客は聴覚と視覚の両方からサブミナルに台詞を受け止め、無意識に役者に自分を投影し、まるで自分が発した言葉をオウム返しのように聞き、自分の深層心理に語りかけられ責められているような錯覚に陥る。

★続きはartissueWEB版で

超サイボーグ・フェミニズム宣言——小池博史の《新・三人姉妹》

小池博史ブリッジプロジェクト『新・三人姉妹』
2019年5月16日(木)&17日(金)@三鷹市芸術文化センター 星のホール

2019年5月17日、小池博史・作《新・三人姉妹》を観た。2012年5月にパパ・タラフマラを解散すると、小池は「小池博史ブリッジプロジェクト」を立ち上げた。宮沢賢治シリーズと《マハーバーラタ》の制作を大きな柱とし、最近ではこれに《世界会議》が加わっている。これもシリーズ化するのだろう。そうした雄大な活動を見渡すと、今作は二義的位置づけの小品とみなされるかもしれないが、それは間違っている。《新・三人姉妹》は、MeToo運動に見られるごとく、いかなる女性観をもつのかという今日もってもアクチュアルな問題のひとつに対する彼の回答だからである。



©Hiroshi Koike

《新・三人姉妹》はチェーホフの有名な作品を現代日本に置き換えた翻案である。チェーホフ劇は19世紀末ロシアの貴族社会の崩壊期に、零落する家族の希望と絶望を舞台化した群像劇だが、小池版は21世紀初頭の日本を舞台にした中流階級の三姉妹の夢と現実、愛と反発、希望と失意を交錯させた悲喜劇である。といってもチェーホフ劇の筋や登場人物のほとんどは排除されている。焦点は三姉妹に絞られ、彼女たちの大まかな設定だけが原作と対応している。一女は婚期を過ぎても自身のまじめな女性教師であり、二女は奔放なところのある性格で、三女は恋にあこがれる。姉たちに対抗意識をもつ少女、いや、少女というには彼女を含め、三姉妹とも原作より年長に見える。彼女たちは地方都市に住み、モスクワならぬパリにあこがれを抱いている。

舞台はしかし猥雑で、ユーモラスで、ときに挑発的でさえある。何も無い空間に椅子が三つおかれている。その中を三人の役者／ダンサーが文字通り縦横無尽に踊って歌って、叫び、笑い、喜び、嫉妬し、そして踊って踊って踊りまくる。その踊りは、バレエを基本にしているが、バレエのように天上を目指して軽やかに重力を超えようとするのではない。三人とも見事なダンサーでありながら、むしろ重力という名の現実へ引き戻されて床に倒れこむかのようになり、踊る。いふならば、バレエの脱構築、パリ・オペラ座の脱構築である。

何体かのフランス人形が舞台に持ち込まれ、椅子や床に座らされるのだが、あか抜けな服装の姉妹たちが旋回するたび、床を駆けまわるたびにスカートがめくれ上がり、大きく長いズロースが丸見えになる。その様子は幼女のようでもあり幼女の遊ぶ人形のようなものである。彼女たちは現実と夢の交錯し

た世界を生きているのだ。

音楽と歌もダンスと同様である。シャンソンが流れたり、現代音楽が流れたりするなか、ときにはア・カペラで、三人は自在に歌う。とりわけ三女の福島梓の歌が圧巻であった。しかしそれらは商業ベースのショーの音楽や歌とは違い、聴衆をメロウな甘さに引き込む体ものではない。舞台上流れる音楽の底にはかすかに哀切感が感じられ、歌にも、元気な合いの手からもうっすらと寂寥感がただよう。舞台後半で彼女たちが衣服を脱ぎすて黒い下着姿になるときも、その姿態は男性客の眼を楽ませる種類のエロティシズムではなく、レスリングのコスチュームを思わせる。だから男の欲望を誘うような仕草をしても、キャバレーのレヴューのような妖艶さともなわない。そして闇のなかで三つの電球を身体に這わせたり、振り回しながら観客を見つめたりするダンサーたちは実存としての深淵を観客に突きつけて挑戦的である。それは男性の視線をうつつ鏡としての肢体を擬態するにもかかわらず、その対極にある。いうならば、ムーラン・ルージュの脱構築である。



©Hiroshi Koike

舞台を乱舞する三姉妹は仕事のためか理想の男性を検索してか、盛んにパソコンのキーボードをたたいた挙句、何度も倒れこむ。その反復的瓦解を観ながら思い起こしていたのは、ダナ・ハラウェイの「サイボーグ宣言」である。ハラウェイは電子工学とバイオテクノロジーがもたらすフェミニズムの理想をサイボーグのイメージに仮託して現代社会の価値観脱構築の夢を語った。しかし役者／ダンサーたちはすでに強靱なサイボーグである。アスリートに比肩する身体的な強靱さもさることながら、表現力の幅と深さにおいてサイボーグ的に強靱である。小池が「宣言」を読んだかどうか知らないが、彼ならきっとこういふだろう。すなわち、電脳空間や遺伝子工学と結託する前に女性は身体性の強靱さの可能性に満ちている。その開発こそがまず重要である。身体感覚を研ぎ澄ましてこそ、サイボーグへの道は開ける。

そうかもしれないと思う。そうだと思う。ただしそれを訴えるのに《三人姉妹》が適切であるのかどうか。舞台を疾走する強靱なダンサーたちの身体をもってしても、現状は何も変わらないと示唆しているかに見えてしまうからだ。

Von・noズ 真髓

仰向けで手足を動かす赤ん坊を見て、「まるで踊っているようだ」と、その様子を表現することがあるが、「踊っている」と感じたことを、別の言い方にして伝えることはできるのだろうか？具体的な言葉になり得ない、その曖昧さこそがダンスの力であると私たちは思う。シンプルに「ダンス」という単語に抱く印象は、音に乗る、体を動かす、ステップを踏むなど、大多数の人が想像するであろうダンスと私たちが考えるダンスはなんら変わりない気がする。その上で私たちは、この「ダンス」がどのような形を成しているも「ダンス」の感覚を覚えるということも伝えたい。ダンスのスタイルによって見た目が異なっている、単にそれは「ダンス」の表情の違いなのだと私たちは感じる。

ダンスってなんだろう？とはじめて疑問に思ったのは大学生の頃、「踊る」ダンスしかしてこなかった私たちが「創る」ダンスと出会ったことがきっかけであった。作品に向けたクリエイションを行うなかで、「踊ること」への意識が変わり、ダンスに対する価値観も変わっていったように思う。踊りは始める瞬間から終いまで、無意

識になりがちな細かい作業を丁寧に捉え、肉体と精神の両面で答える過程のなかで、それまでの自分達はただ表面的に身体を動かしてただけであったことに気がついた。何故足を踏み出すのか、何故手を前に出すのか、視線はどこを見ているのか…など、疑問を持たないところまで削いでいく行為が、私たちにとっては踊ることと創ることを重ねる第一歩であった。この経験で得た感動は、初めて「ダンス」に触れた時の感動と同じものであったから、ただ躍動的に動くことだけがダンスなのではないと思うようになった。ほんの2ミリの動きにすら意味を持たなければならぬと感じた時、自分たちがもつ身体が何をどう捉えているのか、どうやったら表現ができるのかを考えるようになり、ダンスはこんなにも凝縮されて身体から出るものなのだという実感を持った。このそこはかない魅力について考え続ける限り「ダンス」は形をさまざまに変えて人の心を揺さぶるものなのではないかを感じている。

例えば切ない気持ちになった時、「胸がぎゅっとなる」という表現をすることがある。その感情が起きている身体に対し

て、その言葉が一番しっくり来ているとは限らない。きっと身体でしかわからないことや身体でしか伝えられないことは存在する。身体でしかわからない音や声、人に届ける。声や言葉を越えて動きで、私たちは、何ごとにも代え難い動きを見



Von・noズ

日本大学芸術学部演劇学科洋舞コース出身の上村有紀と久保佳絵で2014年に結成。主な振付・構成・演出を上村有紀が行う。ダンスで心の機微を描くことを大切に、振付やシーンを緻密に組み立てることにこだわりを持つダンスカンパニー。表面からは知りにくい隠された感情や姿に焦点を当て、日常に潜むひずみを捉えるダンス作品の在り方を模索中。

次回公演
ダンスショーケース『吉祥寺ダンスライヴvol.1』
2019年11月15日(金)～17日(日)@吉祥寺シアター

うえもとしほ すこやかクラブ 主宰 すこやか

私はすこやかクラブというパフォーマンスカンパニーを主宰しています。

すこやかクラブは身体表現や踊りなどを取り入れた、元気でアクティブなパフォーマンスとちょっとシュールな笑いがミックスされた作風が持ち味の団体です。

そんなすこやかクラブの長である私ですが、私自身はあまりすこやかではありません。

胃腸が弱いので豪華な食事を食べすぎるとお腹が痛くなって夜眠れなくなりますし、献血に行ったら血の中のヘモグロビンが足りないため採血できないといつも断られますし、坂道の上とすぐに息が切れますし、身体の機能もどんどん衰えていってまして、いつか自分もみんなも死んじゃうのかと思うと悲しい気持ちになりますし、もう生きてるだけで踏んだり蹴ったりでへっぽこびーな毎日です。

そんな私の作品創作の源となっているのは「すこやかな人間になりたい!」という想いです。

“すこやか”と聞くと明るく前向きで健康な感じのイメージが浮かんでくるかと思いますが、私の考えるすこやかとはちょっと違います。つらかったり、落ち込んだり、なんにもうまくいかないダメダメな自分でも、それはそれでいいじゃない。いい時も悪い時も、どんな自分でもやさしく肯定できる。それが私の考えるすこやかな状態です。

現在すこやかクラブは本公演の他に、たちかわ創造舎という廃校になった小学校で演劇イベント「怪奇クラブ」を毎年夏に開催しています。観客は教室や職員室、校庭などで行われる様々なパフォーマンスをツアーガイドに案内され見て回ります。怪奇クラブでは、エセ・スピリチュアル身体測定を体験できる「スピリチュアル保健室」やトイレでうんこにまつわるすごろくをする「うんこすごろく」などの観客参加型のインスタレーションを組み込むなど、演劇作品を上演するという枠にとどまらない作品創作に挑戦してきました。

また、定期的に開催していた主催イベントではお客様にいただいたお題

からその場で作品をつくってみる「即興演出講座」なるコーナーを設け、演出家、パフォーマー、観客の境界線を越えて時間を共有する体験を提供してきました。

このように様々な試みを行う中で、最近、いわゆる演劇公演と言われるような形式は私にとってベストな表現

手法ではないのではないかと感じるようになりました。

今後は私にとっての最適な表現形式がどんなものであるのか、模索しつつ、すこやかな人間になるべく、日々創作していきたいと思っています。今日この頃です。



すこやかクラブ

2011年に立ち上げ。日常に潜むときめきや不条理をあらゆる身体動作で表現。演劇、ダンス、歌、分け隔てなく取り入れて、総合格闘技ながらボディープローを効かせるのが持ち味。立川市にある旧校舎を活用した文化施設たちかわ創舎を製作拠点に活動中。

次回公演 すこやかクラブ タイトル未定
2020年2月下旬～3月上旬@横浜(予定)

artissue

発行・編集 artissue編集部
編集部 金原知輝 川村和央
http://stage-arts.jp/artissue/
E-mail/artissue2@gmail.com

カンパ募集!!

現在、「artissue」は編集部の自費のみで運営・発行しています。まだ試行錯誤の段階ですが、応援して下さる皆様からのカンパをお願い致します。集まったカンパは今後の運営資金として大切に使用させていただきます。これからも前衛(的)舞台芸術について多くの方に紹介していきたいと思っています。いくらでも構いませんのでご支援のほど宜しくお願い致します。誌面広告も募集しています。

振込先: 郵便振替 00130-9-359857 「artissue」 ※備考欄にカンパとご明記下さい。
他行からの振込 ゆうちょ銀行 019 当座 0359857

artissue



小池博史ブリッジプロジェクト『新・三人姉妹』©Hiroshi Koike

13

舞台芸術専門誌
前衛(的)芸術
みんなのアバンギャルド

特別企画 舞台人と生活

「俳優の自立」浦弘毅(山の手事情社) / 「演劇と生活、雑感」長堀博士(楽園王)

「現在の私の生活と演劇について」丹澤美緒(フリー) / 「コーヒー・メジャー・スプーン 花菖蒲

あるいは小雨とカーディガン」南慎介(Ammo) 【注目アーティストの視点】「真髓」Von・noズ /

「すこやか」うえもとしほ 【StageISSUE】「等身大の<憲法>」柴田隆子 / 「不条理と異端の

共生」輪心庵 / 「超サイボーグ・フェミニズム宣言——小池博史の《新・三人姉妹》」三宅昭良

「WEB contents」

- die pratz 現代劇作家シリーズ9「日本国憲法」を上演する 長堀博士(楽園王主宰、劇作家、演出家)
- 破局の後の壊れた日常 OM-2『Opus No.10』 新野守広(立教大学教授 ドイツ演劇研究者)
- SNS社会へ出立する卒業生への贈り物 座・高円寺劇場創造アカデミー 9期生修了公演『犬と少女』 藤原央登(劇評家)
- “政治的でない人はいない”と“表現をしない人はいない”は、同一線上にある “意識”であり“生活”そのものではないのか? 牛川紀政(音響家)

- 正系なき時代の異端は誰がそう名づけるのか? 北里義之(音楽・舞踊批評)
- 夕暮れの侘しさと、笑いと 藤原央登(劇評家)
- 「PAMS/ソウル芸術見本市」の報告書 真壁茂夫(OM-2演出家)
- 〈アート〉と〈アクティビズム〉の狭間で ーライバツハ、北朝鮮、福島第一原子力発電所ー 石川雷太(現代美術家)